



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.131
2014.8.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

38

「下伊那教育会 郷土調査部考古学委員会」

長野県には全県の教師が会員となる信濃教育会があり、各都市には支会としての教育会がある。下伊那には下伊那教育会があって飯田市・下伊那郡の学校教師は全員が会員になる。私も下伊那の学校に勤務したときは会員でした。教育会には各種の委員会があって研究調査活動をしている。その一つに郷土調査があり、下伊那では明治31年に郷土調査部を設け活動している。大正10年には郡史をと計画され、考古学調査からと鳥居竜蔵先生の指導で始まった。図版『下伊那の先史及び原史時代』を刊行し、本論は鳥居先生の手稿が書かれず未刊となった。戦後、26年郡誌編纂委員会が出来て、大場磐雄先生の指導で郡下の考古学悉皆調査が始まった。2・3巻の古墳時代編が出来たのは30年でした。1巻原始時代は学界の進展が激しいので後にとなって、1巻に取り組んだのは56年からで、刊行は平成3年でした。郡誌の仕事は現在も継続されていて実に60年の長期に亘っている。歴史・地理・自然・気象の分野で其々中心になって研究調査をしているのは教育会の各調査部会である。

23年 戦後新たに郷土調査部の中に歴史調査部が設置され、委員の中に考古学関係の教師がいて、自分たちの手で発掘調査をするようになったのは35年の下伊那での旧石器時代遺跡治部坂遺跡の調査からでした。36年阿島遺跡(弥)・37年座光寺原遺跡(弥)・38年新切遺跡(縄)・40年満島南遺跡(弥)・41年恒川遺跡(弥)・43年寺所遺跡(弥)等と調査を続ける中で考古学委員会が独立した。

下伊那教育会では会員から拠出金を集めて教育参考館の建設を計画し、39年3階建ての参考館が完成した。各委員会の収集資料を中心に展示され、考古資料は1階の3室に展示された。その中には私が中高時代に採集した土器石器もある。下伊那教育会参考館資料集その1『考古資料』・その2『考古資料II』を刊行している。

考古学委員会には日本考古学協会員が大沢和夫・佐藤甞信・今村善興・神村透・

宮沢恒之・伴信夫がいて活発であった。調査遺跡でも分かるように弥生時代の遺跡が多く、神村が高校生のころ型式編年した下伊那の弥生土器についての再検討をしていた。その成果を纏めたのが『長野県考古学会誌』4号(42・3)「特集 下伊那地方の弥生文化」で、大沢・神村・佐藤・宮沢・今村が書いている。調査の結果下伊那の弥生土器の編年は前期林里式・中期寺所式北原式恒川式・後期座光寺原式中島式となった。私も負けん気になって長野県学校科学教育奨励基金に『中部高地への弥生文化の波及と定着について—とくに伊那谷を中心として—』のテーマで応募した。

地域での弥生研究の高まりが長野県考古学会大会を下伊那で開こうとなって、42年11月25・26日の二日間飯田市下伊教育会館で『弥生文化の東漸とその発展』のテーマのシンポジウムを持った。会員だけでなく県外からも弥生研究者が参加し70余人で、県外からは26人 そのうち発言されたのは国分直一・佐原真・紅村弘・外山和夫・向坂鋼二・阿部義平・平野吾郎・金井塚良一・梶國男・工楽善通・梅沢重昭・横田義章等で、発表は神村・永峯・桐原・笹沢・宮沢・佐藤の6名が中央高地における弥生文化の波及、中期弥生文化の発展、後期弥生文化の展開の三テーマで天竜川流域・千曲川流域・中信地域と県内全域の状況について発表し、参加者から、特に県外からの研究者の発言・質問は鋭く応答に会場のみなが聞き入った。完全とは言えないが発表者にとっては勉強になり、何と云っても地域のみの研究者の交流を超えて、外からの視点での発言や語りから自分の世界を広げることが出来たのが最大の成果でした。とくに夜は教育会館別館での障子を取り払っての広間となった2階で、炬燵に足を入れて車座になっての時間を忘れての語らいは参加者の強い思い出となった。

こうした大会での成功は地域の研究者に自信を与え、教師のみの考古学委員会では満足できなく、地域の考古学研究者や関心を持つ人達の集まりをと下伊那考古学研究会をとって呼びかけ発足した。

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。



◀考古室の解説

目次

■田舎考古学人回想誌 下伊那教育会郷土調査部考古学委員会 神村 透 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第124回) 佐野忠史 …3
■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡-女として考古学研究者として-(第1回) 岡田淳子 …2	■考古学者の書棚 「興亡の世界史 第20巻 人類はどこへ行くのか」 加藤元康 …4

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第1回) 岡田 淳子

①考古学と出会う

真面目だけの女学生だった私は、敗戦後、教科書に墨を塗りながら、何を信じて生きればいいのか解らない日が続いていた。

まず、日本歴史が信じられなくなった。神話から始まる女学校の教科書が、かなり歪曲されていることは事実だったとしても、私は疑心暗鬼になり「明治時代って本当にあったの?」と父に聞いた。「お父さんが生きていたのだから、それはあったよ」と明治生まれの父は答えた。しかし、遡るにつれて答えはあやふやになり、124代続いた天皇制についても、そういうことになっているという回答が変わった。たしか歴史を掴みたい、これが私の学ぶ目的になっていった。

高校生のとき、校舎の増築にともなって敷地が遺跡の上にあることがわかり、夏休み前の朝礼で校長先生から「発掘をするので、興味のある人は夏休みに手伝うことができる」と話があった。私は、これに参加することで歴史の事実近づけるに相違ないと、すぐに発掘参加を決意した。

明治大学の後藤守一(ゴトウシュイチ)先生が調査団長、武蔵野博物館の甲野 勇(コウノイサム)、吉田 格(ヨシダイタル)両先生が調査を指導し、和島誠一(ワジマセイイチ)先生が東洋大学の学生たちを連れてこれに加わり、都立第6高等学校(現新宿高校)の男子生徒たちも参加した。後で知ったことだが、調査指導の先生方は東京の名立たる考古学者の面々で、この先生たちと出会ったことが、私の人生を切り拓くことに繋がった。

「中野富士見台遺跡」と名づけられたこの遺跡は、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡で、私はここで発掘の仕方を学んだ。「ぱりっ、ぱりっ上土が剥がれて床面が現れるのです」と和島先生から教えられて体験した床面を出す極意、この上を1300年前の人が歩いたのだと思うと胸が震え、これこそが紛れもない歴史の真実なのだ確信した。

中野富士見台遺跡の発掘は、翌年もその翌年も続けられ、はじめ100余名参加した生徒たちも、何時しか数名になっていた。古墳時代後半の正方形に近い竈のある竪穴住居跡を5軒と、村を囲んでいたと思われる深いV字形の溝の一部を掘った。遺物は鬼高式と言われていた土師器の一括、紡錘車、砥石、瑪瑙の勾玉などで、後藤先生はその勾玉が「コの字型」をしているので、奈良時代に入ってからのものかも知れないと言われた。私は甌の大きさに違いがあることに興味をそそられた。最も大きなものは一升炊けるが、小さいものでは一〜二合しか炊けない。それが出土した住居の大きさと関係しているようなので、萩原宏道さんの求めに応じて、西郊文化研究会の雑誌に載せることになった。私の最初の小さな論考であった。この遺跡の調査報告も書き、後藤先生の計らいで、「考古学年報2(昭和24年度)」に載せられている。

その頃、私は足しげく井の頭文化園内にあった「武蔵野博物館」に通っていた。初めは拾い集めた土器片を持参しては土器形式を覚えてもらうだけだったが、次第に甲野、吉田両先生から親しく教えるようになる。甲野先生は博物館

に通じていて話題が広く、訪問する度にクジャクの羽や模造の小さな埴輪などをお土産にくださって、話題は過去の社会や生活に想いを馳せた。考古学が発掘だけでは終わらないことを知った経験である。

当時、最初に買い求めて読んだ考古学の本が今でも手元にあるが、それは濱田青陵先生の『通論考古学』(昭和23年発行)であった。小さな本なので、直ぐ読み終わると思ったのに、何度読んでもなかなか頭に入らない。今見ると、用語は古いが読み易いものなのに、知識が無いということはこういうことなのだ知らされた。

夏休みに一人で夜行列車に乗り、登呂遺跡の見学にも出かけた。後藤先生から杉原荘介先生を紹介された時、杉原先生は写真撮影用の檜の上から、わざわざ降りてきて挨拶をくださった。和島先生の指導で水路の割れた矢板運びを手伝いながら、登呂遺跡の水田と水路についての見解も伺った。心に刻まれた経験である。東京大学や実践女子大学から参加していた女子学生のみなさんとお話しして、大学で学ぶ女性たちの考え方も学んだ。大学へもいらっしやいと誘ってくださったが、その後お目にかかる機会には恵まれていない。敗戦直後から口ずさんできたマダム・キューリーの愛称の詩が新たに甦り、科学を志す喜びを自分のものにしたいと、思い始めたのもこの頃である。

次第に考古学に魅せられていった私は、大学で考古学を学べたらどんなにか楽しいだろうと思うようになり、考古学に進む道へと照準を合わせて行く。引っ込み思案だった私としては人生で最初の勇気を振り絞って、後藤守一先生に手紙を書き、先生のお宅へ伺った。

後藤先生は「本当に考古学を学ぼうと思うのなら、我田引水だけでなく、考古学専攻のある明治大学へいらっしやい。」と勧めてくださった。またスポンサーとして、女子の私の希望に理解を示してくれた亡き両親にも感謝している。



▲高校のクラブ活動(前列中央が筆者)
中野富士見台遺跡の発掘後 1949.8.10

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士課程単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウイスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 教員
1978~88年	北海道大学理学部 文学部 教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 教員
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回は渡辺誠先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト¹²⁴

亀ヶ岡遺跡 ～青森県つがる市～

佐野 忠史

気が付けば、青森に来て20年近い月日が流れた。その間、様々な遺跡を調査し、色々な思い出がある。国史跡指定をめざして調査を始め、「一生分の縄文土器は見た」と感じた縄文前～中期の円筒土器文化の石神遺跡、急斜面上に畝立てされた平安中期の畠跡が発見され、そこに立っているのも大変だった牛溝(1)・(2)遺跡、「何でそんなところを掘るんだ?」と言われながらも自分の決断を信じ、民家の庭先から縄文前期中葉の出産歴のある成人女性人骨を発見した国史跡田小屋野貝塚など、挙げればきりが無い。

しかし、その中でも現在のボクの「No.1フェイバレットサイト」は、亀ヶ岡遺跡である。

言わずと知れた、歴史教科書には必ず載っている、上野の東京国立博物館に鎮座する国重要文化財の「遮光器土偶」が出土した縄文晩期の遺跡である。特に優れた土偶・土器などが、江戸時代以後、菅江真澄、滝沢馬琴、蓼虫山人などの著名な文人墨客の注目を集め、「亀ヶ岡文化」の名の起りとなった遺跡でもある。昭和19(1944)年6月26日に、その主要部分が、「亀ヶ岡石器時代遺跡」として国史跡に指定されている。



▲国重要文化財遮光器土偶(複製)

かつてのボクにとって、亀ヶ岡遺跡とは、「ボクには関係のない“すごい遺跡”」であった。ところが平成17(2005)年2月11日、亀ヶ岡遺跡が所在する木造町と、ボクが奉職していた森田村などの5町村が市町村合併し、「つがる市」となったことで、予想だにしていなかった事態が発生した。

合併して1年ほど経った平成18(2006)年の初夏のある日、文化庁と青森県教育委員会の方々が来訪され、「地元つがる市として史跡保存管理計画を作って亀ヶ岡遺跡の保存管理体制を構築するとともに、史跡やその周辺の発掘調査の実施について本格的に取り組んでほしい」と要請されたのである。合併してから教育委員会に「文化課」が設置されたとはいえ、当時文化財担当の専門職員はボク1人。当然、それはボクの仕事となった。その日から、ボクと亀ヶ岡遺跡の格闘が始まる。

まず、保存管理計画を作ることを優先し、過去の史跡関係の書類を紐解くことから始めた。その結果、昭和50年代の国土調査の際に地番や大字・小字の入れ替えがあったため、史跡指定時の地番と現在の地番とが照合できていないところがあるため、史跡指定地の範囲が不明確になっていることがわかり愕然とした。結局、土地の登記簿謄本を取り寄せ、史跡指定時の地番がどのように変遷したかを洗い出し、1筆

ずつ現在の地番に置き換えていく作業を行うことになった。その結果、史跡指定地を現在の地籍図上に復元することができ、指定地の面積も確定した。また、指定地の9割以上が私有地であることもわかった。

次に行った作業は、報告書などから明治以後、東大や慶大、青森県教育委員会や青森県立郷土館がおこなった過去の調査地点を、復元した史跡指定地の地籍図上に落としていくことであった。その過程で、「亀ヶ岡遺跡の顔」である国重文の遮光器土偶の出土地点・出土時期が、曖昧であるということがわかり頭を抱えた。しかし、出土地点については、過去の文献や地元住民の話、故村越潔弘前大学名誉教授が旧所有者に聞いた話などからその地番を割り出すことができ、正確な出土年月日も国重文指定に先立つ青森県重宝指定の際の書類・文献を発見し、そこから知ることができた。

また、意外にも、過去の調査では住居跡が未発見で、遺跡の空間構成も不明確なこともわかった。平成20(2008)年以後、ボクが調査担当者となり、地元自治体としてはじめての亀ヶ岡遺跡の発掘調査を開始した翌年、史跡指定地西側隣接地より、初めての住居跡(晩期後～末葉)が姿を現した。寒風吹きすさぶ12月上旬のある日、それを亀ヶ岡地区の住民に見てもらおうと開催した現地説明会には約100名の方々集まった。その際、ある人が、「亀ヶ岡地区で昼間に家にいて動ける人のほぼすべてがここに来ている」と耳打ちしてくれた。その時の感激を、ボクは一生忘れないだろう。現在も史跡内外の調査は継続中で、昨年、史跡指定地内からも晩期中葉の住居跡が発見された。すぐれた土器や土偶などを生み出した亀ヶ岡の人々やムラの姿が明らかになりつつある。

亀ヶ岡遺跡の保存管理計画は、隣接する田小屋野貝塚のものと同本とし、平成21(2009)年3月に『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡・田小屋野貝塚保存管理計画書』として刊行された。保存管理計画策定事業開始の際、亀ヶ岡地区住民への1回目の説明会に来てくれたのはたった1人。諦めずに開いた2回目の説明会では、「昔から家が建っていて田畑もあって、住民の生活があるのに、何が史跡の保護だ!」「だいが前に役所に亀ヶ岡遺跡の保護策を講じたほうがよいと言っても何もなかったくせに、いまさら何しに来たんだ!!」と怒鳴られたことが



▲亀ヶ岡遺跡で初めて発見された住居跡(2009年)

なつかしい。いまでは、この方々が積極的に遺跡の調査や保護に協力してくれる。平成24(2012)年から史跡地公有化事業を始められたのも住民の協力のおかげ。1割に満たなかった公有地が、今や史跡指定地の1/3以上に達している。亀ヶ岡遺跡をめぐる仕事ができるのは、役所関係のみなさん、発掘作業員さんたち、そして何より住民のみなさんのおかげである。

最後に、亀ヶ岡地区住民のみなさんより言われ続けていることがある。「亀ヶ岡遺跡近くに新しい展示施設を建設して、

今は東京国立博物館所蔵となっている国重文遮光器土偶を借用して何年かに一度でもよいから飾ってくれ。たのむぞ!」ということ。昨年度からこれに関する動きをはじめ、亀ヶ岡遺跡出土品を持つ大学・研究機関などにご協力いただいている。そんなに遠くない将来、新展示施設を開設することを心に誓っている。また、亀ヶ岡遺跡と田小屋野貝塚を含む18遺跡で構成される「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界遺産に登録されるよう、頑張っていく所存である。

※今回のマイ・フェイバレット・サイトは榊原滋高さんです。

考古学者の書棚

「興亡の世界史 第20巻 人類はどこへ行くのか」

福井憲彦、杉山正明、大塚柳太郎、応地利明、森本公誠、松田素二、朝尾直弘、青柳正規、陣内秀信、ロナルド・トビ 著／講談社(2009)

加藤 元康

世界的な通信網の発達によって、国際的な大小の様々な情報が即時に入手できるようになった現在、世界史はより重要になっている。

講談社創業100周年記念として出版された『興亡の世界史』全21巻は、世界史すべてを網羅するものではなく、「歴史を問うという行為は、現在の位置を見きわめ、現代人が直面する問題のありかを明確にして、これからの人類の進むべき道を問うためにこそある」という視座のもと、ローマ帝国やモンゴル帝国以外にも今日的課題と関係するイスラームや中国、アメリカなどの地域や、人類誕生から近現代など幅広い時代を扱っている。全21巻は通読してはいないが、第00巻『人類文明の黎明と暮れ方』は人類の誕生から地中海古代文明までの文明史であり、第13巻『近代ヨーロッパの覇権』では、今の歴史学や考古学と関係する近代学問の成立がテーマの一部である。その中でも終巻である本書は本シリーズの視点そのものの「人類はどこへ行くのか」というタイトルが付けられ、各シリーズでは取り扱わなかった人類史共通の人口や宗教などに関することが設問され、章ごとに完結した内容となっている。

- 第1章 世界史はこれから
- 第2章 「100億人時代」をどう迎えるか
- 第3章 人類にとって海はなんであったのか
- 第4章 「宗教」は人類に何をもたらしたか
- 第5章 「アフリカ」から何がみえるのか
- 第6章 中近世移行期の中華世界と日本
- 第7章 繁栄と衰退の歴史に学ぶ

これらの章では、西欧や中国を中心とする西洋史や東洋史を結合させた日本的な世界史から脱却するための世界史学の提唱や、人類史としての人口やその増減要因、大陸とともに地球を形作る海からみた人類拡散史、社会とキリスト教やイスラーム教などの宗教やアジア共同体の可能性、アフリカへの誤解と理解するための構図、中近世の日本と中華世界との関係が述べられ、最後の章では、青柳正規、陣内秀信、

ロナルド・トビの対談が掲載されている。多彩な内容で、すべてを理解することはなかなか難しい。

自己の関心に引き寄せれば、人間の自己家畜化による出産間隔の短縮と出産年齢の延長、定住生活での衛生状態の悪化、感染症の流行、社会的状況における子供への意識の変化など人口に関与する様々な要因や、4回ある日本の人口増加の第1が縄文時代、第2が弥生時代であるという点も面白い。さらに、「温かい海」と障壁となった「冷たい海」は興味深く、海に囲まれる日本列島を考える際のヒントとなるかもしれない。

また本シリーズの視座である歴史から何を導き出し、未来に繋げるのかは、歴史を学ぶ端くれとして、常に悩みの種である。それについて、本書の「はじめに」で福井憲彦は「問い」の大切さを教えてくれる。問題なのは歴史に何を問うかであり、問いの性格によって視点も異なる。ある特定の視座だけを特権化、絶対化してはならず、また歴史的脈絡が異なる以上単純な教訓史観、現在の基準で過去のあり方を判断するような時代錯誤は避けなければならない。現代人が様々な関心をもって歴史に対して問いを発することで歴史像を構築し、現在を問い直すことができると述べる。

歴史を問う構造は、人類史・世界史なのか、地域史なのかというスケールの違いや、何を問うのかという内容によっても異なり、様々な見方があり得る。日本の文化資源は現代社会へのインパクトを求められつつあり、その方向は国際化してきている。人類史・世界史という大きなスケールで何を問い、未来に託すのか、それを考える示唆を本書は与えてくれたように思う。

アルカ通信 No.131

発行日 2014年8月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行所 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp